

多忙化の原因・背景にあるもの

小・中学校の教員の勤務実態調査の結果などを踏まえ、教員の多忙化の原因・背景にあるものを整理すると、次のことが挙げられる。

(1) 教員の勤務の特殊性

教員の職務の中心は、児童生徒に対して、教科や領域の指導を行うことであり、1日のほとんどを教室等での学習指導にあてている。

授業以外にも、児童生徒会活動、校外で行われる体育・文化関係の大会への取組、部活動の指導などは、児童生徒が学校にいる間に行わなければならない。

従って、授業のための教材研究や教材・教具の準備、学級事務、校務分掌事務などの仕事は、児童生徒への指導が終わってから行うことになるため、放課後の限られた勤務時間に仕事を終えられず、帰宅してから仕事を行う教員が多くいる。

教員は、自分の担当する児童生徒の学習指導や生徒指導以外にも、校務分掌事務を担当しており、1人で全く異なる複数の職務や役割を果たさなければならないことは、教員の勤務の特殊性の1つである。

また、教員の仕事は、児童生徒は言うまでもなく、その保護者、同僚教員等との良好な関係の上に成り立っており、その関係を保つために配慮しなければならないことが多く、多様な対人関係におけるストレスが多いのも特殊性の1つである。

このような勤務の特殊性が、教員の多忙や多忙感に繋がっていると考えられる。

(2) 教員の職務に対する姿勢

教員の仕事は、児童生徒に対する教科や領域の指導や生徒指導を行うことであり、その教育活動を通して、児童生徒に与える影響は非常に大きい。

従って、教員は、教育活動において、児童生徒の成長のために、何事にも万全を尽くして臨もうとする傾向が強く、児童生徒のために労力や時間を惜しまず職務にあたっている。

また、教員は、教育活動や校務分掌にかかわることは、自分が全て責任もってやらなければならないと考え、児童生徒やその保護者からの要望全てに応えようとする

るあまり、「やるべきこと」が増え続けている。

このような何事にも全力で、自力で取り組む教員の職務に対する姿勢が、教員に多忙感をもたらし、また、実際に多忙の原因となっていると考えられる。

(3) 山積する教育課題や要請

現在、社会変化に対応した様々な改革が、学校教育に求められており、各学校において、その具体的な取組がなされている。その取組は、これまでの教育活動を踏まえて実践できることもあるが、中には、全く新たに取組まなければならない教育課題も多くある。

また、保護者のみならず、地域住民や外部団体からの学校教育に対する様々な要望や要請が数多く寄せられている。これらの中には、学校の新たな教育課題となるものもあり、学校はその対応に誠心誠意努めている。

新しい課題に取り組むことは、教員にとって、多大の時間と大きなエネルギーを要することから、教員の多忙化に繋がっていると考えられる。

(4) 教員に求められる資質・能力の拡大

これまで教員には、学習指導と生徒指導の力量が主に問われていたが、今はそれらだけでは、教員としての役割を果たすことができなくなっている。

学校の教育目標達成のために組織の一員として自分の職務に同僚と協働して取り組む能力、保護者や地域住民等に学校や自分の教育活動について説明する能力、教育活動実施のための外部関係団体と折衝する能力、限られた時間の中で複数の仕事をやり遂げる能力、様々なストレスにうまく対処し自分の精神を安定に保つ能力等々、新たに求められるものは多い。

しかし、教員の中には、新たに必要とされる能力を身につける時間とゆとりをもてないまま、日々の児童生徒の指導や業務に追われている現状がある。その結果、業務の遂行に支障をきたしたり、心身ともに疲れ果てたりして、多忙感を増大させてきたと考えられる。